

清末俠義小説『萬年青』について

——方世玉故事成立初探——

岡 崎 由 美

1. はじめに

清末光緒年間の俠義小説『聖朝鼎盛萬年青（一作「清」）』（又名『萬年青奇才新傳』、『乾隆巡幸江南記』）は、乾隆帝南巡説話を、初めてひとまとまりの長編小説に仕立てたものとして知られる。高天賜と名を変えた乾隆帝が、微服で江南に下り、悪を退治して歩く物語は、我が國の水戸黄門傳承に類似しており、武藝に長けた俠客が、その勸善懲惡の治世を助けるという設定も、當時流行の俠義小説の定石を踏まえたものといえよう。

同時にこの作品は、後の大衆文藝のヒーローを創出したことでも、知る人ぞ知る存在である。むしろ、方世玉をはじめ

め、洪熙官、胡惠乾、童千斤らの名は、説唱や地方戯、さらには今なおTVドラマや映畫の脚色によって、原作の知名度を遙かに越えて知れ渡っている。彼らは、廣東生まれのローカル・ヒーローであり、傳承化の頻度及び知名度も南高北低の状況は呈するが、同時に、少林寺の門弟という設定によって、大衆文藝における少林寺英雄故事系列中に、確固たる位置を占めていることも否定できない。

いわば、『萬年青』は、それまでに流布していた乾隆南巡故事と、それ以後大きく發展することになる方世玉少林寺故事を合體させたのである。しかし、『萬年青』のこの創作には、かなり不思議な點がある。根本的な疑問點は、後世の傳承で民間のヒーローとして流布することになる方世玉及び少

林寺の仲間が、『萬年青』では、暴徒として誅殺される末路を辿ることである。少なくとも登場当初は、「性情又烈、專打不平」と少年俠客らしい描かれ方をした方世玉が、世間を騒がす不屈き者と化して誅殺される結末に、世人が納得しなかったことは、後世の方世玉傳承が少年ヒーロー像を形成していることから、容易に想像がつく。それでは、『萬年青』での人物造形の豹變による、物語中での不安定な位置づけは、何によるものだろうか。

また、『萬年青』は、乾隆の江南漫遊故事に廣東の方世玉故事を加えたうえ、物語展開上、この二つのプロットは全く相關性を持たない。方や乾隆帝は江南を漫遊し、方や方世玉は福建と廣東を往來するばかりである。最後に少林寺が暴徒の巢窟として打倒されるぎりぎりまで、『萬年青』の二つのプロットは、個々に獨立して、平行線を辿る。且つ、結末の鎮壓に際しても、片側の主人公乾隆帝は、鎮壓を許可する詔勅の書き手、即ち權力の象徴として關わるのみである。そこまでの漫遊物語の中で果たしてきたような、「皇帝自らが退治する」積極的役割を持つわけではない。この分裂したストーリー構成は、どのような敘事の力學に發し、上記の人物造形とどのように關わるのか。

清末俠義小説『萬年青』について（岡崎）

本稿は、この二つの疑問點に基づき、『萬年青』における方世玉故事成立の發端を考察してみた。

2. 物語の構成

『萬年青』は、數種の石印本テキストが現存するが、物語の章回は些末な文字の異同を除いては皆同じなので、先に物語の構成を述べることにする。まず、足本八集七十六回の章立ては以下の通りである。

- 初集（第一回～第十三回）
 - 二集（第十四回～第二十六回）
 - 三集（第二十七回～第三十八回）
 - 四集（第三十九回～第四十四回）
 - 五集（第四十五回～第五十二回）
 - 六集（第五十三回～第六十回）
 - 七集（第六十一回～第六十八回）
 - 八集（第六十九回～第七十六回）
- このうち、約半分弱が方世玉故事である。以下、その主なストーリー構成を記述する。
- 〔方世玉打擂台〕
- 第四回後半～第八回

廣東の絹商人方徳は、行き倒れのもと武藝家苗顯、翠花父娘を救い、後に苗翠花を妾として、息子世玉を儲ける。父に従つて杭州を訪れた方世玉は、雷老虎が決闘臺を築いて殺傷を繰り返すことに義憤を覺え、決闘臺で雷老虎を殺すが、その妻李小環に深手を負わされる。苗翠花は、師伯の五枚尼姑に助太刀を頼み、李小環とその父で武當派の高弟、李巴山を殺す。武當派との間に禍根を作つた方世玉は、福建少林寺の至善禪師のもとへ入門に行く途中、廣州で機房の人間に襲われた胡惠乾を救い、共に至善禪師に弟子入りする。

〔胡惠乾私下山〕

●第十四回〜第十七回

機房の人間に父を殺された胡惠乾は、仇討ちに逸り、至善禪師の戒めを破つて福建少林寺を脱走、廣州に戻つて仇討ちを果たす。機房側は、武當派馮道德道人の高弟二人を送り込むが、胡惠乾に殺される。また、馮道德の弟子で、雷老虎の息子雷大鵬も方世玉の返り討ちに遭う。少林派と武當派の仲は險惡になり、弟子を殺されて激怒した馮道德自らが、仇討ちに乗り出すが、五枚尼姑の仲裁によって、事なきを得る。

〔胡惠乾恃惡〕

●第四十四回〜第四十七回

増長した胡惠乾は、福建少林寺に戻らず、廣州西禪寺に武道館を開き、機房の人間に亂暴を繰り返す。目に餘る横暴に、官府は捕縛を命じる。

〔胡惠乾喪命〕

●第五十七回〜第六十六回

峨嵋山白眉道人の高弟高進忠は、微行の乾隆に見込まれ、官兵と共に西禪寺を圍んで、胡惠乾を誅殺する。官軍は、勅命によって白眉道人の出馬を要請。少林寺を圍む。

〔大破少林寺〕

●第七十回〜第七十六回

弟子を殺されて激怒した至善禪師は、方世玉らと官軍を迎え撃つが、白眉道人と、その助太刀に回つた馮道德、五枚尼姑の手にかかり、少林寺は殲滅される。

以上のように、方世玉故事は、一續きのストーリーを展開しており、乾隆故事が、いかにも民間傳承の潤色らしく、一話完結式のプロットを數珠繋ぎにしているのとは、對稱的である。

が、物語そのものは、理由なき亂暴者へと豹變した胡惠乾を軸に、少林寺は暴徒の肩を持ったという理由で、いわば巻き添えを喰つて潰されるのである。従つて、胡惠乾はさてお

き、至善、方世玉、洪熙官らは、物語の中で善惡の位置づけが極めて曖昧になる。價值觀の多様な現代小説ならいざ知らず、そもそもが勸善懲惡で話の進んできた俠義小説において、これはやはり不自然な感を免れまい。なまじに、結末で

廣東省垣内の人民聞知由白眉道人大破了少林寺、殺死至善禪師等人、無不歡呼載道、皆以爲從此除了天下之害。

と描寫されていると、方世玉らの登場について、改めて考えざるを得ない。一體、方世玉ら少林寺の英雄は、物語の中で、いかなる役割を擔う登場人物であつたのだろうか。

もとより、『萬年青』は、乾隆帝の惡人退治の話でもあるから、皇帝の威徳の稱揚がなされているのは明らかである。従つて、太平の治世を亂す暴徒が鎮壓されるのは、物語の力學というもののだが、それでは方世玉は、なぜ、本書の周日青や楊遇春のように、太平の治世を守る好漢たりえなかつたのか。本書は、微服漫遊する乾隆帝を助け、貪官汚吏、暴徒凶漢に立ち向かう英雄好漢が續々登場する。『施公案』『三俠五義』をはじめ、俠客が清官の片腕となつて、太平の世を守るために活躍するという、清代俠義小説の定石を踏まえている

清末俠義小説『萬年青』について（岡崎）

のである。

従つて、少林寺の俠客俠僧の、惡人退治、人助けの物語が、乾隆の「強きをくじき、弱きを助く」漫遊記と同じベクトルを共有しても、おかしくはないはずである。この點は、第十五回で、少林寺の師匠至善禪師が、

天下無不散之局，只要你等此去，將來報效皇家，總得一官半職，上可以報國，下可以爲民，他日封妻蔭子，顯我教門。

と、方世玉らを諭すところにも見て取れる。名君、清官と正義を同じくする俠義小説の力學は、潛在的にはあつたのである。

しかし、本書の約半分を占める方世玉の物語は、この力學に全く取り込まれず、そのまま誅殺の結末へ急旋回していく。そこには、別にどのような力が働いているのかを、次に考えてみたい。

3. 火燒少林寺

『萬年青』八集七十六回のうち、初集の打擂臺故事は、方

世玉故事の中でも最も有名なもので、少年英雄が、權力を傘に着た土地の顔役を退治するという、明瞭な仕立てになっている。加えて、初集の雷老虎退治にも、二集における胡惠乾の仇討ちにも、少林派と武當派の對峙が描かれ、少林派が正義の味方、武當派が悪役となる力關係が出来上がっている。

この力學は、方世玉とは直接關わりのない、乾隆巡幸故事の中でも補強されている。例えば、第九回と第二十三回で、二度も乾隆の命を救う好漢、唐奐は、

乃是福建泉州人氏。曾在少林學習武藝，現充府內教頭。

という、少林寺の門弟である。それに對して、第八回に登場する潮州兵備道臺頼大鵬は、

乃是一個海賊頭目，他自少在武當山馮道德道士手下爲徒，學習得渾身武藝，十分高強。

という、武當派門下にして、海賊あがりの貪官である。頼大鵬は、廣東海陽縣の公用金を横領しようと謀って、知縣に拒否され、府縣の公印を盗むが、これを取り戻し、捕縛に功の

あったのが、福建少林寺の至善禪師である。このように、初集、二集では、少林寺の英雄が、明らかに正義の側として、好意的に描かれている。これが、後半では、武當派が鎮壓側、少林寺が暴徒側に回るわけである。後世の方世玉像の發展が、「朝廷の誅殺」を「暴虐壓制」に、「鎮壓」を「受難」に捉え直すところに起因しているのは、この落ち着きの悪い少林寺の位置づけから、十分に首肯できよう。

また、第十六回には、

後李關拜白蓮教餘黨爲師，三敗楊遇春，後被少林寺英雄活捉，後來正法，此是後話，不提。

というくだりがある。楊遇春すら齒の立たない白蓮教の妖人を、少林寺の英雄が捕らえるエピソードは、ここに示唆されるのみで、この後は、最後まで出てこない。が、少なくとも、二集までを見る限りは、少林寺の英雄が、世間を騒がす妖人暴徒を退治する勸善懲惡の方向で、物語は設定されていたことが分かる。

もう一カ所、ストーリー展開上の大きな齟齬は、第四集の最終回、即ち第四十四回末尾である。

未知果來鬧事否、且看五集分解。至於胡乾（ママ）伏法、四十九個少林僧征西藏、火燒少林寺等節目、全在五、六、七集之中。

しかし、八集七十六回本の五、六、七集、即ち第四十五回から七十六回までに、「四十九個少林僧征西藏」「火燒少林寺」といったストーリーは存在しない。

この部分は、上洋海左書局石印本及び北京師範大學圖書館藏石印本（初集の表紙・内封・目錄共缺落）には見られるが、上海日新書局石印本では、削除されている。これは、後印とおぼしい日新書局版が、辻褄のあわぬくだりを削除したものと考えられる。

この「少林僧征西藏」及び「火燒少林寺」は、明らかに洪門天地會の起源傳承、いわゆる西魯傳説に起因する、天地會は、乾隆五十一年、臺灣的林爽文の亂によって、朝廷にもその存在が知られ、嘉慶道光年間には、反清の秘密結社として一大勢力を形成する。天地會の起源を語る西魯傳説は、秘密結社内部の傳承ゆえ、神話的色彩を帯び、また地名人名も異同が多いが、おおよその骨子は以下の通りである。

康熙年間、西魯番が國境を侵し、朝廷は擊退の策を募つ

清末俠義小説『萬年青』について（岡崎）

た。少林寺の僧侶らが名乗り出て、西魯番を打ち拂う。その後僧侶らは、寺に戻って修行を續けるが、ここに、少林寺を放逐された叛徒が、恨みを抱いて、少林寺に謀反の企てありと朝廷の奸臣に密告した。奸臣の讒言によって、少林寺は燒き拂われ、僧侶は皆殺しに遭うが、この難を逃れた五人の僧が、高溪廟洪（一作「鳳」又作「紅」）花亭に反清復明の血盟をし、報復を誓ったのが、天地會の起源である。⁽²⁾

『萬年青』石印本第四十四回末尾に見られる「少林僧征西」「火燒少林寺」は、正に天地會起源説話の骨子なのである。藏」蕭一山『近代秘密社會史料』卷五には、

道袍血染浪飄飄、得回西魯起根苗。

封官不受修行善、韃子胡人用火燒。

という天地會歌謠が收録されている。⁽³⁾

また、天地會關係の傳承では、この少林寺を福建少林寺とするものも多い。『近代秘密社會史料』に引いた天地會抄本「西魯序」では、「福建福州府閩龍縣九蓮山少林寺」としている。同書卷四には、

中國文學研究 第二十二期

福建名山是九連，少林今已化爲煙。
昏君無道裁荊棘，屈殺英雄實可憐。

なる天地會歌謡が見える。さらに、『萬年青』とほぼ同時期頃の民間の説としては、徐珂（一八六九～一九二八）『清稗類鈔』『會黨類・天地會』の項に、

傳言天地會之起因者、頗近神話、謂在福建福州府莆田縣九連山中之少林寺、……寺僧誦經之暇、恒究心於軍略武藝焉。康熙時、藏人寇邊……

という。⁽⁴⁾

しかし、『萬年青』は、最終的に天地會故事を採用しなかった。「征西藏」がないのはもとより、「火燒少林寺」にしても、『萬年青』では燒き討ちに遭ったわけではない。住持至善禪師を筆頭に、方世玉ら主立った門弟は殺され、或いは捕縛されるが、

少林寺不必焚毀、另招高僧住持。

という處置に收まっている。天地會に關するくだりは、全く出てこない。

即ち、少林寺の一黨は、物語の中で、英雄好漢から、反清の會黨員になりかけ、再び轉換して暴徒の一味となるのである。最後に、このストーリー設定の迷走を、出版の状況から考えてみたい。

4. 『萬年青』の版本

『萬年青』について、版元の名がはつきりしているのは、以下の三種である。

● 上海五彩公司石印本 二集二十六回⁽⁵⁾

題箋「繪圖聖朝鼎盛萬年青」

封面・目錄・卷首全て「聖朝鼎盛」

第二集第一冊封面「光緒十九年（一八九三）上海英商五彩公司石印」

● 上海日新書局石印本 八集十六卷七十六回⁽⁶⁾

卷首「聖朝鼎盛×集」

初集第一冊目錄末「上海日新書局石印」⁽⁷⁾

● 上洋海左書局石印本 八集七十六回

封面「繪圖萬年清×集 廣東雙門底海左書局批發」

卷首「聖朝鼎盛×集」

版心下題「上洋海左書局石印」

回目、本文共に些末な字句の異同はあるが、最も大きな違いは、すでに述べた第四十四回末尾の「天地會故事豫告」の有無であろう。

この他に、清刊本が存在する。

・萬年清 五集十八卷二十七回⁽⁸⁾

封面「内附方世玉打擂臺／繡像萬年清奇才新傳」

目錄題「萬年清第×」

初集 第一回～第七回

二集 第八回～第十三回

三集 接續第十三回～第十八回

四集 接續第十八回～第二十三回

五集 第二十四回～第二十七回

石印本との大きな違いは、石印本系列が、二十六回で集別を區切っているのに對し、刻本は、二十七回で區切り、話は

清末俠義小説『萬年青』について（岡崎）

ここで一應の完結を見ていることである。孫楷第『中國通俗小説書目』に「始作者爲廣東人、上海書賈續成之」というように、二十八回以降は、上海の石印本において、續作された可能性が高い。そうであればこそ、方世玉らの位置づけの豹變にも頷けるであろう。

方世玉故事の主要登場人物が全て廣東人であることも、ここに親和性を求め得よう。方世玉が雷老虎と決闘することになるのも、雷老虎が、「拳打廣東全省、脚踢蘇杭二州」の對聯をこれ見よがしにして、「不知傷了我多少鄉親」だからであり、

明日待孩兒打死這雷老虎、與客鄉親報仇便了。

と、動機は鮮明である。單なる通りすがりの義憤ではなく、鄉黨意識がある。方世玉の活躍を、

這回必能與我廣東人爭口氣了。

と期待していた周囲は、方世玉の勝利に、

廣東全省鄉親均皆大喜，一路鼓吹鞭炮。

という騒ぎになり、

方老伯有如此一位少年英雄兒，一則爲廣東人爭氣，二則也爲本地除去大害，此番功德實爲無量。

と、褒めそやすのである。方世玉が少林寺に入門するのは、この後である。少林寺のヒーローである前に、あくまで廣東のヒーローたりえんとする向きにあったことは、明白であらう。しかし、廣東以外の土地では、おそらく福建少林寺の方が、傳承に彩られたダイナミズムを發揮するであらう。そして、傳説の福建少林寺にも、二つの顔があった。

二十七回までに出てくる福建少林寺は、武術の聖地、俠僧俠客の産地としての力學に據っているが、その續きは、福建少林寺のもう一つのイメージ、燒き討ちされた天地會の發祥地へとずれていったのである。⁽⁹⁾ 少なくとも、四十四回を書いた時点で、その作者は、方世玉らを天地會傳承の中へ取り込むつもりだったはずである。しかし、おそらくは、並行するストーリー、乾隆帝の勸善懲惡漫遊記との力關係や、時節

柄、反清復明をあからさまに描くのは、忌避するところがあつたのだらう。物語は、再びねじれることになる。

忌避した際に、これが、胡惠乾の改心から少林寺英雄の活躍へと後戻りしなかったのは、少林寺燒き討ちの力學がそれだけ大きく働いていたから、と言えよう。天地會抜きであっても、物語の力は、少林寺が毀される方向へ働いていたわけである。

従つて、廣東の英雄から少林寺の英雄となり、乾隆の勸善懲惡の力學と交わっていく可能性もありえた方世玉は、お上に楯突く反清復明の明瞭な對時關係も持ち得ぬまま、結果だけは強烈にイメージされた破滅の道を辿る。既存の乾隆帝漫遊説話を應用しつつ、新しく創作されたヒーローを盛り込む趣向は、二つの少林寺のイメージによつて、勸善懲惡の力學を不自然に逸らされた。同時に、そこには、少なくとも二十七回までは廣東びいきの作者と、上海の書賣の思惑もそれぞれ反映されているといえよう。

注

(1) 方世玉のヒーローとしてのデビューは、杭州での決闘であるが、乾隆の江南漫遊と話が交わる氣配はない。この段階では、單なる挿入話という扱いのつもりか、或いは少林寺の門

弟となった後、改めてヒーロー・デビューさせるつもりだったのだろうか。

- (2) 『天地會』(一)、中國人民大學清史研究所・中國第一歷史檔案館合編、中國人民大學出版社、一九八〇年。

- (3) 『近代秘密社會史料』、蕭一山、岳麓書舍、一九八六年。初版は、北平研究所、一九三五年。

- (4) 他に、『近代秘密社會史料』卷四「葉進辭」は「福州府福田縣九連山」、羅爾綱『天地會文獻錄』に收録された守先閣本天地會文獻、及び施列格 (Gustave Schlegel) 『天地會』(Thian Ti Hwui, The Hung League, Or Heaven Earth League) 第一編では「福州府九連山少林寺」としている。

(秦寶琦譯、『天地會』(一) 所收)

- (5) 北京師範大學圖書館藏、二帙八冊のみ。この版の七十六回足本は未確認。第二十六回末尾は、「後來尚有奇怪事情、再觀三集、便知分曉」と、日新書局版と同じ。海左書局版は「尚有奇怪事情、再看三集、便知分曉了」と些か違う。なお、同圖書館藏表紙・内封・目錄缺落本は、こうした文字の異同や四十四回末尾豫告の存在などから、海左書局本に近いと見られる。微妙な差異であるが、五彩書局本、日新書局本より、この缺落本の方が、全體に白話文の口語の度合いが高い。

なお、この缺落本は、八集七十六回、卷首と目錄が「聖朝鼎盛萬年青×集」、封面と題箋が「繪圖萬年青×集」。

清末俠義小説『萬年青』について (岡崎)

- (6) 北京師範大學圖書館藏。

- (7) 未見。上海師範大學圖書館藏。『中國通俗小説總目提要』の書誌資料に據る。『乾隆巡幸江南記』(時華標點、上海古籍出版社排印、一九九六年)。

- (8) 北京圖書館藏。

- (9) 一九三五年に刊行された江喋喋の舊派武俠小説『少林小英雄』は、『萬年青』の二十七回までに含まれる少林寺故事、即ち「方世玉打擂台」と「胡惠乾下山」のみをリライトしたもので、些かの枝葉はつけているが、ほぼ忠實にストーリーをなぞっている。もとより、『少林小英雄』にも、天地會の影はない。(江喋喋『少林小英雄』、黑龍江人民出版社、一九八七年復刻)。